

『風立ちぬ』の文法

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00061566

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



『風立ちぬ』の文法

飯島 洋

1.

『風立ちぬ』（野田書房、1938.4）の冒頭「序曲」（初出「風立ちぬ」「改造」1936.12の「発端」）で、「私」は発病する以前の節子と時間を共にしていた日々を振り返る。

それらの夏の日々、一面に薄の生ひ茂った草原の中で、お前が立つたまま熱心に絵を描いてみると、私はいつもその傍らの一本の白樺の木蔭に身を横たへてゐたものだつた。さうして夕方になつて、お前が仕事をすませて私のそばに来ると、それからしばらく私達は肩に手をかけ合つたまま、遙か彼方の、縁だけ茜色を帯びた入道雲のむくむくした塊りに覆はれてゐる地平線の方を眺めやつてゐたものだつた。やうやく暮れようとしかけてゐるその地平線から、反対に何物かが生れて来つつあるかのやうに……

いったい「私」はどの時点からこの幸福な時を思い出しているのだろうか。「私」を作者に還元して伝記的事実と照合するなら、既に彼女を看取った後、そしてリルケ「レクイエム」による転回の起こる前といった位置づけも可能であろうが、テキストはそのようなテキスト外現実の参照を求めてはいない。

ところで、この「序曲」冒頭の文体的特徴として、「～たものだつた」という過去における反復・継続を示す文末表現が挙げられる。「それらの夏の日々」、「お前」が絵を描く傍らで「私」が木陰に身を横たえているという行為、そして「何物かが生まれて来つつある」かのように地平線を眺めやる行為が、何月何日と特定されるものではなく、幾度も繰り返されていたことを示している。

そして、そのような特定されない幾度も繰り返された営みの中に、一回限りの出来事が到来する。

そんな日の或る午後、(それはもう秋近い日だつた) 私達はお前の描きかけの絵を画架に立てかけたまま、その白樺の木蔭に寝そべつて果物を齧じてみた。砂のやうな雲が空をさらさらと流れてみた。そのとき不意に、何処からともなく風が立つた。私達の頭の上では、木の葉の間からちらつと覗いてゐる藍色が伸びたり縮んだりした。それと殆んど同時に、草むらの中に何かがぱつたりと倒れる物音を私達は耳にした。それは私達がそこに置きつばなしにしてあつた絵が、画架と共に、倒れた音らしかつた。すぐ立ち上つて行かうとするお前を、私は、いまの一瞬の何物をも失ふまいとするかのやうに無理に引き留めて、私のそばから離さないであつた。お前は私のするがままにさせてみた。

「果物を齧じつ」たり、「砂のやうな雲がさらさらと流れ」る事態までもが、繰り返されていたのかどうかはわからない。ただ、そのような時間が一瞬のことではなく、ある時間の幅を持っていたことが「てみた」という表現からうかがえる。その継続する事態の中で、突然風が立つ。風が吹いている状態はある時間の幅を持っていたかもしれないが、語りはその時間を切断し、風が起こるその時に注意を集中する。木の葉のあいだを洩れて見える青空が「伸びたり縮んだり」と語られるように、続く一文は時間の継続を示すようにも見えるが、そこでは「した」という文末表現で結ばれ、継続した出来事というよりは瞬間の出来事として語られている。

半過去で語られる持続・反復を基調とする文章中に単純過去によって一回限りの出来事が挿入される作品としては、堀辰雄に近いものでは Marcel Proust の *À la recherche du temps perdu* (『失われた時を求めて』以下『失われた時』) を挙げることができよう。この作品と堀とのかかわりについては多くの論考があるが、翻訳の試みである「プルウスト雑記」(「新潮」「樺の木」「作品」1932.8) から『美しい村』について、戸塚学は「長い形容詞句を名詞で受けて並列する文体」をプルウストの翻訳体験をとおして獲得していることを指摘し、「従来、無意志的記憶や『失われた時を求めて』細部のモチーフとの類似が取り上げられ

てきた同作は、こうした文体的な試みの集成という意味でこそ、堀のブルースト体験の総決算と言うべき作品なのである」と述べている（戸塚 2011）。『風立ちぬ』の場合、影響関係があるとしてもそれは文体的なものではなく、むしろ高橋梓が指摘する「イメージ」に注目してそれを小説の基盤とするといった、主題にかかわる指摘がなされている（高橋 2016）。

2.

しかし、『失われた時』における時制の問題は、『風立ちぬ』の読みにもかかわる大きな問題ではないかと考えられる。『失われた時』の冒頭部分を引く（日本語は拙訳による）。

Longtemps, je me suis couché de bonne heure. Parfois, à peine ma bougie éteinte, mes yeux se fermaient si vite que je n'avais pas le temps de me dire : « Je m'endors. » Et, une demi-heure après, la pensée qu'il était temps de chercher le sommeil m'éveillait ;

Proust, *Du côté de chez Swann*, Gallimard, 1914, p. 3

長い間、私は早くに床に就いた。時々、蠟燭が消えた途端、私の眼はすぐに閉じてしまうので、「私は眠るのだ」と思う間もないほどだった。そして半時間ほどのち、眠ろうとする時間だという考えが私の眼を覚ますのだった。

冒頭の Longtemps, je me suis couché de bonne heure. は複合過去をとっているが、これについては「早くから眠った」時代が終わってしまい、現在はもうその習慣を持たない事を示している。」という指摘がある（榎本 1989）。不眠の夜に悩まされてきた「私」は、目覚めの時の感覚について語ったのにつづけて、幼年期のコンブレーをはじめ、自分が過した様々な部屋についての回想が半過去を基軸にして綴られてゆく。そして回想は少年時代のコンブレーの記憶に移り、就寝の前に母の接吻をうけようと待ちかまえた夜のことが綴られる。母のとった行動など、単起的な出来事は単純過去で叙述されるが、ここでも語りの軸は半過去が務めている。

A Combray, tous les jours dès la fin de l'après-midi, longtemps avant le moment où

il faudrait me mettre au lit et rester, sans dormir, loin de ma mère et de ma grand'mère, ma chambre à coucher redevenait le point fixe et douloureux de mes préoccupations.

Ibid, pp. 10-11

コンブレーでは、毎日午後の終りにベッドに行って眠れぬまま母や祖母から離れて眠りに就かねばならなくなるずっと前に、私の寝室は私の苦しみと心配との不動点となるのだった。

夜中に目を覚ましてなされるコンブレーの回想に一区切りがつくと、有名な紅茶とマドレーヌの挿話が登場する。コンブレーについて就寝の儀式とその舞台以外のものが存在しなくなって長い歳月がたったある日、今日も明日も陰鬱な一日となるだろうと考えながら、「私」は母から勧められた紅茶にプチットマドレーヌと呼ばれるお菓子を浸し、口をつける。動作は一回限りのものであるから母の行動なども単純過去だが、以下の箇所注目したい。

Mais à l'instant même où la gorgée mêlée des miettes du gâteau toucha mon palais, je tressaillis, attentif à ce qui se passait d'extraordinaire en moi. ... D'où avait pu me venir cette puissante joie ? Je sentais qu'elle était liée au goût du thé et du gâteau, mais qu'elle le dépassait infiniment, ne devait pas être de même nature. D'où venait-elle ? Que signifiait-elle ?

Ibid, pp. 54-55

しかし、お菓子の欠片の混じった一口が私の口蓋に触れた瞬間、私は身震いした、私の中で起こっていた尋常ならざるものに注意を払って。(略)この力強い喜びはどこから来たのだったか？私はそれは紅茶とお菓子の味わいと結びついていると感じていたが、味わいを無限に超えていて、同じ性質のものではないはずだった。それはどこから来ていたのか？それは何を意味していたのか？

あえて単純過去と半過去の際を明確にするためにぎこちない日本語訳になったが、身震いという自身に沸き起こった不可思議な感動が身体化された瞬間は単純過去で記され、その感動の到来そのものは持続的な半過去で叙述されている。特に D'où venait-elle? (それはどこから来ていたのか?) などは、身振りを

もたらず感動が私に訪れた時のことを指している以上、tressaillir と同一時制でよいのではないかとも思われる。

ここで、フランス語の時制の問題について確認しておく必要がある。

英語の過去形のように通常の過去を意味する時制は、フランス語では複合過去が用いられる。一般的に複合過去は文語である単純過去に対して口語的、継続・反復である半過去に対して完結している、と理解されているが、事態はもっと複雑である。バンヴェニストら言語学者による多岐にわたる議論が積み重ねられてきた問題だが、これについては以下の説明を示しておく(大久保 1990)。なお PC は複合過去、IMP は半過去、PS は単純過去を意味する。

PC の場合は行為を発話時点から表現する為に、行為の始まりと終わりは明確で、全体として点のように見えるというアスペクト価値を持つのである。

IMP の場合は行為の渦中に視点を置いて描写する為に、その行為の終わりは見えず、持続のアスペクトとして捉えられるのである。行為の渦中に立って描くということは IMP が表す臨場感、描写的性格をもよく説明する。

複合過去は発話者が今いる時点から過去を見渡し、それが既に完了したものとして示す。それにたいして半過去では、今ここにいる発話者は一旦姿を消し、過去の中に立ってそれを現在として描き出す。「半過去記号素は、モダリティの価値をとまなわなにかぎり、現在時間や未来時間に属する事態に対応することができない」との指摘があるように(川島 2015)、半過去で語られる内容は語り手の現在にそのまま接続することはない。

又単純過去は「現在と完全に切り離された過去の出来事を表」しており、「瞬間的行為(action-point)を表す」とされる。そして語りの場面における単純過去と半過去の根本的な差異として、大久保は次のようなことを指摘する。

IMP は物語の背景を描き、PS は前景を描く(略)前景とは、物語の骨格をなす出来事であり、粗筋を語る時にその材料となるものである。背景とは、その出来事を理解する助けとなるようなそれを取りまく状況である。

プチットマドレーヌの体験はまさにこれに該当する。身震いは確かに継続する事態ではなく、瞬間的な出来事であったろう。しかしそれより、身震いしたということがここで語られていることの前景であり、それをもたらした感動に

関する説明は背景をなしている。

複合過去、単純過去、半過去は、こうした極めて微妙な、しかし決定的な差異をもって役割を果たしている。しかし、その差異は容易に日本語に明示できるとは限らない。

淀野隆三他訳『失ひし時を求めて』（武蔵野書院、1931）と五来達訳『プルウスト全集 第一巻』（三笠書房、1934）が、当時堀が読み得た『失われた時』冒頭巻の日本語訳だが、当該箇所訳はそれぞれ

私は身顫ひしたのだ、異常なことが身うちに起つたのに注意を向けて。(略)
同じ性質であるはずはないことを感じた。この喜びは何処から来たのか？
(淀野他訳)

私は身顫ひして、異常なものが心内に生じたのに注意した。(略) 同一性質のものである筈がないと感じられた。喜びは何処から来たか？
(五来訳)

となっている。前景・背景の差はそう簡単に訳出できるものではなかった。

3.

さて『風立ちぬ』には、パリ・ディドロ大の Daniel Struve 氏によるフランス語訳 *Le vent se lève*, Gallimard, 1993 がある。これを参照すると、堀がこの作品で選択した文体が時間の叙述に極めてふさわしいものであることがはっきりしてくる。

Par ces journées d'été dans la prairie recouverte d'une herbe haute et drue, alors que tu peignais avec passion, je restais toujours non loin de là, allongé à l'ombre d'un bouleau. Quand le soir tombait, que tu achevais ton travail et venais me rejoindre, nous restions un long moment nous enlaçant les épaules, à regarder l'horizon encombré de lourds nuages sombres aux franges garance. Comme si à cet horizon enfin gagné par l'obscurité quelque chose, au contraire, était en train de naître...

(PROLOGUE)

「お前」が絵を描いていること、その側に「私」がいること、日が落ちるこ

と、「お前」が仕事を終え「私」に寄り添うこと、それらすべてが半過去で叙述される。前掲大久保論では半過去が「事行の始点と終点が明確でないということ、つまり、いつ始まっていつ終わるのがわからない持続の相として捉えられているということ」と説明されているが、「それらの夏の日々」は既に終わっているにもかかわらず、その完結したという厳然たる事實は「過去における現在」の語りの後に追いやられ、反復された持続の相だけが残る。そして繰り返された事象は背景となり、風が吹きおこった瞬間（現実には突然風が起こることも幾度もあったはずである）が、一回限りの、交換不可能な、特権的な時間として前景化する。

この冒頭部分を、後の章の叙述と比較するとこの部分の特殊な位相が浮き彫りになる。

私は、私達が共にした最初の日々、私が節子の枕もとに殆んど付ききりで過したそれらの日々のことを思ひ浮べようとする、それらの日々が互に似てゐるために、その魅力はなくはない単一さのために、殆んどどれが後だか先きだか見分けがつかなくなるやうな気がする。

と言ふよりも、私達はそれらの似たやうな日々を繰り返してゐるうちに、いつか全く時間というものからも抜け出してしまっていたやうな気さえる位だ。

（「風立ちぬ」）

ここでも「思ひ浮べよう」と試みている現在がいつなのかははっきりしないが、ともあれ現在の「私」がサナトリウムで節子を看病しながら過ごした、無時間的な日々を、過去のものとして回想しているということはわかる。「それ等の夏の日々」を振り返るとき、「私」は「お前」とともにあった反復される時間の中に身を置き、それを語る現在の自分の位置を消去してしまっているといえる。

堀のテキストでは、それにつづく「お前」を抱きしめる場面は「私のそばから離さないであつた。お前は私のするがままにさせてあつた」と、ある時間の持続が明示されている。この部分を Struve 氏は次のように訳している。「そのとき不意に」以降を引用する。

À cet instant, soudain et sans qu'on sût d'où il venait, le vent se leva. Les taches

indigo que nous devinions à travers le feuillage de l'arbre au-dessus de nous s'étendirent, puis se contractèrent. Presque aussitôt nous entendîmes un objet lourd tomber dans l'herbe : la toile que nous avions abandonnée non loin de là devait être tombée avec le chevalet. Alors que tu te précipitais pour la relever, je te retins de force, refusant de te laisser partir, comme pour ne rien perdre du moment que nous étions en train de vivre. Tu me laissas faire.

「私」が「お前」を引き留めたこと、そして「お前」が「私」にそうするがままにさせたことが、単純過去で示されている。特に後者については或る程度の時間の持続があったはずだが、訳者は風が吹き、立っていく「お前」を「私」が引き止め、「お前」が「私」に抱きしめられるのをそのままにする、という一連の動作を物語の前景として位置付けたといえる。堀は「てみた」としているが、「私」の意志的、一回的な動作と、反復され他の時点における同様の出来事と異質なものと特定することのできない営為との対象の相で捉えるならば、そしてそもそも「するがままにさせる」がある程度の時間の幅を必然的に持っており、日本語では過去形で表せば「させていた」となるのが自然であることを考慮すれば、ここが単純過去であることは『風立ちぬ』の語りの意図に沿うことになる。

『風立ちぬ』原文に戻ろう。もちろん、複合過去や半過去、単純過去をめぐる後年の言語学的な議論を堀が知る由もない。しかし、反復と持続を併せて意味する「～てみたものだつた」を繰り返した後に「～た」を登場させ、さらにこの回想される日々を「それら」という、特定の時間に位置付けることのできない、語りの現在との関係が膿化される指示代名詞で提示した作者は、既に完結した過去を現在の観点から語っている（はずの）語り手を「それらの夏の日々」の光景の背後に没却させ、さらにその日々のうち「風が立つた」一連の出来事の特権的な時間として浮き立たせることに成功したといえるだろう。

4.

節子が発病する以前の日々を振り返る「序曲」、発症してからサナトリウムに

入所して療養生活を送る日々が綴られる「春」「風立ちぬ」は、それを語る現在の時点が明確でないにせよともかく回想形式を採っている。これに対して、節子の病状が悪化してから、彼女の歿後、「私」がK村で彼女のことを想いながら過ごす日々が描かれる「冬」「死のかげの谷」の章は、日記形式を採っている。当然のことながら、綴られる出来事を経験した語り手が、その完了した時点から完了したばかりのことを語っていることになる。フランス語に関する大久保の説明を援用すれば、複合過去がその役割を果たす「行為を発話時点から表現する」形式であるといえる。

自分たちの幸福な(はずの)生活をモデルにして書かれた小説草稿らしき「ノオト」に結末をつけることについて、「私」は「現在のあるがままの姿でそれを終らせるのが一番好い」と判断した後、次のように述懐する。

現在のあるがままの姿?.....私はいま何かの物語で読んだ「幸福の思ひ出ほど幸福を妨げるものはない」といふ言葉を思ひ出してゐる。

(「冬」)

「思ひ出してゐる」のではあるが、実際には〈ノオトについて思いめぐらせた後、問題の記述を思い出した〉ことを、「そんなことを私は何か着落かない気持で考へながら、(略)彼女の寝顔をぢつと見守つた」というその後の行為のあとで日記に書いているはずである。日記の現在形には完了が伏在している。ちなみにこの箇所はフランス語訳では次のようになっている。

La situation présente... Je me suis souvenu d'une phrase que j'ai lu dans un roman :

« Rien n'entrave le bonheur comme le souvenir du bonheur. »

(HIVER)

「思い出してゐる」は複合過去を取り、「思い出した」として訳されている。ノートを書き終えた際の記述は

わたしはこれまで書いて来たノオトをすつかり読みかへして見た。わたしの意図したところは、これならまあどうやら自分を満足させる程度には書けてゐるやうに思へた。

(「冬」)

とあり、こちらは明確にノートを読み返す行為はその日におこなわれて完了し

た行為であることが明白である。このように日記形式である以上当然のことながら、そこでは語り手が顕在し、語る時点から完了した行為が説明されているのである。

5.

語り手の位置は、登場人物の呼称にも作用する。語り手が語られる過去に埋没している「序曲」では、節子は「お前」と呼びかけられる。「春」と「風立ちぬ」では呼称は「節子」に変更され、「病人」と非常に客観化された語によって名指されることもある。「お前」と比べれば明らかに語り手は語られる過去に対して距離をとっており、物語としてそれを提示しようとしていると捉えることができる。

お前が立つたまま熱心に絵を描いてみると

（「序曲」）

私がいつものやうにぶらつと散歩のついでにちよつと立寄つたとでも云つた風に節子の家を訪れると

（「春」）

私は、肩掛にすつかり体を埋めるやうにして目をつぶつてゐる節子の、疲れたと云ふよりも、すこし興奮してゐるらしい顔を不安さうに見守つてみた

（「風立ちぬ」）

事態が複雑になるのは「冬」と「死のかげの谷」である。「冬」では日記体ではあるが地の文では「節子」と呼ばれ、やはり「病人」という語も使われる。「お前」の用法は鍵括弧で叙述される心内語に限定される。ところが「死のかげの谷」では、再び「お前」という呼びかけが使われる。

そうしてベッドに近づきながら、節子の寝顔を屈み込むやうにして見た。

（「冬」）

本当にこう云つたやうな山小屋で、お前と差し向いの寂しきで暮らすこと

を、昔の私はどんなに夢見てみたことか！……

（「死のかげの谷」）

「冬」と「死のかげの谷」の大きな差異は、前者の段階ではまだ「私」は小説草稿であるノートを書き続けている、つまり小説への意志を維持しているのに対して、後者においては自身の創作については触れられておらず、ひたすら節子の追憶に没入しているところにある。その「私」の意識の差が、節子への呼びかけ方の違いをもたらしていると考えられる。

しかし、「死のかげの谷」ではルルケの「レクイエム」読書体験により「未だにお前を静かに死なせておかうとはせずに、お前を求めてやまなかつた、自分の女々しい心に何か後悔に似たものをはげしく感じ」て、「私」に変化が生じる。死者に依存する姿勢を斥け、「レクイエム」の一節「死者達の間に死んでお出」を自己の死者への態度としようとする。

その後、日記の地の文からは「お前」が消える。「おれには何んにも求めずに、おれを愛してみて呉れた」と、節子の愛の深さを認識する箇所では「お前」と呼びかけているが、これは鍵括弧によって括られている。つまり、これを書いている時点では、その述懐を心内語として地の文から切り離そうという意識を語り手は抱いているのである。

時制の問題と呼称のあり方を軸に、語り手と語られる時間の関係について考察してきた。『風立ちぬ』は、語られる過去の日々、節子との愛情生活への没入と、それに対して距離を取り、物語として構成しようとする作家的意識とが葛藤し、遂には後者が主導的な位置を占め、しかしそれによってこそ愛というものの価値を認識する物語、と理解することができよう。

（金沢大学人間社会研究域学校教育系）

（参考文献）

戸塚学「堀辰雄のプルースト翻訳」（『東京大学国文学論集』6号、2011）

高橋梓「堀辰雄『美しい村』『風立ちぬ』における小説執筆の主題」（『国際文化研究』22号、2016）

榎本いずみ「「スワン家の方へ」に於ける"Sujet intermédiaire"の役割」(「年報・フランス研究」23号、1989)

大久保伸子「語り手の時制としての単純過去」(「茨城大学教養部紀要」22号、1990)

川島浩一郎(「複合過去形と半過去形の選択にかかわるタスクデザイン 時制的弁別とアスペクト的弁別」(「福岡大学人文論叢」47巻3号、2015)

付記 本稿をなすにあたり、近現代文学演習での牧絢音氏による問題提起に触発されるところがあった。お礼申し上げたい。